

尹東柱の詩とチャン・リュル映画：〈チャン・リュル福岡三部作〉を対象に

辻野，裕紀
九州大学大学院言語文化研究院：准教授

<https://doi.org/10.15017/7159358>

出版情報：言語文化論究. 51, pp.83-91, 2023-11-10. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



尹東柱の詩とチャン・リュル映画 ——〈チャン・リュル福岡三部作〉を対象に——

辻 野 裕 紀

1. はじめに

昨年（2022年）末に全国に先駆け、福岡市の KBC シネマにおいて、チャン・リュル（張律）監督の映画『柳川』が公開された。これは『福岡』『群山』と併せて〈チャン・リュル福岡三部作〉と呼ばれる。『柳川』と『福岡』はいずれも舞台が福岡県であるので当然と言えるが、なぜ韓国の全羅北道群山市がロケ地の『群山』も〈福岡三部作〉として束ねられるのか——それは、作品に登場する民泊の主人が在日コリアンで福岡出身であることに加えて、詩人尹東柱が重要な役割を果たしているからである。例えば、主人公と先輩の元妻がソウルの尹東柱文学館を訪れる、主人公の家で働く家政婦が「尹」という姓で、尹東柱の遠戚という設定になっている、尹東柱の「序詩」が登場する、などといった形で、尹東柱が随所に陰に陽に描かれる。

本稿では、まず〈チャン・リュル福岡三部作〉を言語論的な観点から裂開したのち、尹東柱の生を素描し、さらにチャン・リュル作品に現れる尹東柱の詩について概観する。

2. 言語論的な観点から

2.1. ポリグロット性

言語論的な観点から見れば、まず、映画の中に、中国語＝漢語や韓国語（朝鮮語）、日本語など、複数の言語が現出するというのが、とりわけ近年のチャン・リュル作品の特徴である。これを〈ポリグロット性〉と称呼することもできよう。

しかしながら、このポリグロット性は表層的な特徴に過ぎず、それ以外の点でも、チャン・リュル作品は、言語という対象を深く思念する契機を与えてくれるものである。

2.2. 単言語の複言語性

例えば、最新作『柳川』においては、タイトル『柳川』に、「ヤナガワ（柳川）」という日本語の地名と、過去に好きだった女性の liúchuān（柳川）という名前の双方を編み込んでいる。こうしたことばの dualité＝二重性から物語が出発しているところが興味深い。

この二重性を可能ならしめているのは、ほかならぬ〈単言語の複言語性〉である。〈多言語性〉〈複言語性〉とは単に言語が複数併存することではない。複数の言語があるのではなく、単数の言語が本態的に複数性を宿している。言語は混じり合うことをその本質とし、常に相互浸透的に入り混じったアマルガムである。比喩的な表現が許されるなら、例えば、日本語の中に中国語の DNA が刻み

込まれていると言ってもいいだろう。就中、漢字文化圏においてはそういった〈単言語の複言語性〉が時として瞭然と立ち現れてくる。

漢字漢文は、東アジアのリング・フランカであり、東アジアを津梁する機能を有する一方、中国語、韓国語、日本語にはおのおのの漢字音があつて、さらに日本語の場合、訓読みという複雑怪奇な独特のカルチャーもある。それゆえ、同じ漢字であっても、それぞれ聴覚印象は異なり、意味もしばしば変容する。例えば、『柳川』に見られる、居酒屋「堀留」という店名をめぐる、日本語の「水路の終わり」という意味と、中国語の「体を曲げる」という意味との掛け合わせによって生じるメタフォリックな演出が典型的だが、これは、漢字が蔵する複数のレイヤーを至妙に利用した技法である。有名な話だが、例えば、日本語の「愛人」という漢語は、北京漢字音で読めば àiren、すなわち《配偶者》という意味になり、朝鮮漢字音で読めば 애인、すなわち《恋人》という意味になって、そこから立ち上がる指示対象は変転する。言語学にはこうしたありようを表す〈偽の友達〉(faux amis) という術語が存在するが、それをさらに拡張させて、より洗練された形でメッセージ性を付与するのが、チャン・リュル作品を特徴づけるひとつの仕掛けである。

2.3. 言語の威信性

言語学では、あらゆる言語は対等でそこに位階差はないというのが基本公理とされている。しかしながら、現実の世界においては、ある言語や方言が権威と結びついたり、逆に差別を蒙ることがあり、社会言語学では、これを言語の威信性 (prestige) と呼ぶ。『柳川』では北京のことばの威信性が描出されたり、『群山』ではソウルの韓国語と中国朝鮮族の朝鮮語がコントラストをなしたりしていて、「きれいごと」ではなく、実際の言語意識や言語使用のリアリティが精緻に剔抉されている。

2.4. 言語の始原

『福岡』においては、なぜかことばが「翻訳なし」に通じてしまうシーンが幾度となく登場する。例えば、パク・ソダムが公園でベンチに座って泣いている中国人女性と、それぞれ韓国語と中国語で話す場面や、同じくパク・ソダムが古書店の由貴とそれぞれ韓国語と日本語で話す場面がある。互いに別の言語を話しているのに、不思議と自然に疎通できてしまう。これは〈言語の離散性〉という概念に対する異議申し立てのようでもあるし、言語の始原——言語が未分化のころ、言語が分岐する前のありよう——を見せられているようでもあり、かく思考を傾けていくと、やや牽強附会きみではあるが、頻回に映し出される NTT の電波塔がいつしかバベルの塔のように見えてきたりもする。

2.5. ログス過依存のコミュニケーションへの反措定

『福岡』の重要な主題は、ログス過依存のコミュニケーションへの反措定＝アンチテーゼだと筆者は考える。特に当今の疎通は過剰に言語に依存しているように思われる。X (旧 Twitter) などの SNS は典型だが、真贋不明の玉石混淆のことばが処理不能なレベルの圧倒的な速度と量で、日次、我々へと逡至する。そして、私たちが私たちの生のために産出したことばであったはずが、いつの間にかまるで生き物のように、私たちに向かって襲いかかって来る。こうしたありようを、野間秀樹 (2021: 97-107) は、ヘーゲル＝マルクスの用語を援用して〈言語疎外〉と呼んでいるが、本稿の議論にとって重要なことは、人間の疎通があまりにもことばに操舵されすぎているという点である。本来、コミュニケーションというのはもっと身体性を帯びた営為であるからである。

人類学者のバードウィステルは「二者間の対話では、ことばによって伝えられるメッセージ（コミュニケーションの内容）は、全体の35%にすぎず、残りの65%は、話しぶり、動作、ジェスチャー、相手との間のとり方など、ことば以外の手段によって伝えられる」とした¹。つまり、コミュニケーションにおいて言語がメッセージ伝達を担っている割合はごく一部であり、むしろノンバーバル＝非言語的な要素がその多くを占めているということである。言語学の界限でも、近年、マルチモダリティの研究が進展している。

このような視座から照射すると、『福岡』という映画は「人間のコミュニケーションにとって言語とは何か」という、極めて根源的な問いを差し出しているとも言うる。

3. 尹東柱とチャン・リュル映画

3.1. 尹東柱の肖像²

尹東柱は、2016年に封切られた『空と風と星の詩人～尹東柱の生涯～』（原題は『몽주』、李濬益監督、日本公開は2017年）によって、日本でもその名が人口に膾炙することになったように思われる。

尹東柱は、1917年に中華民国間島省和龍県明東村に生まれた。尹東柱の一族は、曾祖父の尹在玉の代、1886年に鍾城（咸鏡北道）から間島の紫洞に移住してきたため、今で言えば「朝鮮族」と呼ばれるような出自を持つ人である。さらに、祖父の尹夏鉉の代、1900年に明東村へと移り住む。1910年には一家でキリスト教に入信し、尹東柱も篤実なるクリスチャンとして長じた。

文学少年で、クラスメイトと一緒に文芸誌を作ったり、詩を書いたりしており、1934年、17歳の時に書いた「生と死」「蠟燭一本」「明日はない」が現存する最初の作品である。一時は龍井を離れ、平壤の崇実中学校に転入学するが、1936年に学校自体が神社参拝拒否問題で廃校となり、再び故郷に戻って、光明学園中学部に編入する。そして、1938年には、京城の延禧専門学校（延世大学の前身）に入学し、文学を専攻することになる。韓国語は崔鉉培から、英文学は李敷河から学んだという。

1941年、延禧専門学校卒業時に、記念として19の作品を集めて自選詩集を77部限定で発兌しようとするが、時局柄、その希望は潰えることとなった。辻野裕紀（2021a）でも叙述したように、1940年前後というのは、朝鮮総督府による所謂「朝鮮語抹殺政策」が激化していった時期だったからである。例えば、1938年には、第3次朝鮮教育令が公布された。これは内鮮一体の皇民化政策の一環として、内地と朝鮮の学校制度を同じくするという内容のものであり、それまで「普通学校」と呼ばれていた朝鮮人の学校も、日本人の学校と同様に「小学校」と呼ばれるようになるが、それに伴って、それまで必修だった朝鮮語科目が随意科目となり、爾来、事実上、朝鮮語科目が学校教育の場から消えていくことになる。1939年には、創氏改名が公布、翌年1940年には、それが施行、また、『朝鮮日報』『東亜日報』といった朝鮮語新聞が総督府の圧力によって廃刊に追い込まれた。1941年には、文芸誌『文章』³『人文評論』⁴が強制廃刊され、さらに、国民学校令によって「国語（日本語）」が「国民科」という科目のひとつとなり政治的な色を濃くしていく。そして、1942年には、朝鮮語学会事件という、悲劇的な出来事が起きてしまう。

こうした狂乱の時代にあって、尹東柱は結局、詩集『空と風と星と詩』を3部のみ作成し、1部は自分用、もう1部は鄭炳昱——のちに国文学者、民俗学者として活躍する——という友人に、さらにもう1部は指導教授の李敷河に渡したという。そして、戦後（解放後）、その詩集が書籍化されるが、その原本となったのは、鄭炳昱所蔵のものであった。

尹東柱は、文学の勉強を続けるために、1942年には、東京の立教大学に留学するが、半年程度在学したのち、京都の同志社大学へと籍を移す。しかし、その翌年の1943年7月に独立運動の嫌疑で特高警察に検挙され、1944年3月に、京都地方裁判所で治安維持法違反の罪で懲役2年が確定して、4月に福岡刑務所の北3舎（思想犯用の監獄）に収監される。そして、1945年2月16日に27歳という若さで福岡刑務所で殞命することとなる。

福岡刑務所というのは、「日本の刑務所のなかで朝鮮半島からもっとも近い距離にある刑務所」で、「朝鮮人の囚人をもっともたくさん収監していた」刑務所だと言われる⁵。死因は不明とされているが、九州大学（当時の九州帝国大学）医学部による生体実験の結果とする説もある。なお、福岡刑務所はその後、糟屋郡宇美町に移転したが、当時の福岡刑務所の隣の敷地にある百道西公園において、毎年2月に「福岡・尹東柱の詩を読む会」主催で尹東柱追悼式が行われている。

尹東柱は今際の際に朝鮮語で「なにやらわからぬことを大声で叫んだ」という日本人看守の証言がある。しかし、日本人看守は朝鮮語ができず、結局、尹東柱が最期に何を言ったのか、言いたかったのか、永遠の謎となっている。これは言語論的には非常に重要なことで、要するに、ことばは人と人とを繋ぐものでもあるけれども、人と人を引き裂くものでもあるということを如実に示している。人間は、ことばが異なるがゆえに、いとも簡単に、無残にも引き裂かれてしまう。我々は、尹東柱の詩によって、尹東柱と繋がり、尹東柱の最期のことばによって、尹東柱と引き裂かれていると言える。

先に、『福岡』という映画の中では「なぜかことばが「翻訳なし」に通じてしまう」と述べたが、もしも当時の福岡刑務所が映画『福岡』のような場所であったならば、と反実仮想してみると、日本人看守も尹東柱の叫びを理解し得たはずで、こうして考えを深めていくと、『福岡』はある意味で〈希望の物語〉のようにも思えてくる⁶。

3.2. 尹東柱の評価と読解⁷

前陳の通り、1940年前後は「朝鮮語抹殺政策」が加速化する時期であり、とりわけ1940年代は、朝鮮語文学史上の「暗黒期」と称呼される。しかし、尹東柱が朝鮮語で竊かに詩を書き続けたことによって、「暗黒期」が「空白期」にはならなかった。それゆえ、文芸評論家の白鉄は、尹東柱を「暗黒期の空の星」と評している。この意味において、尹東柱は、「民族詩人」であり、「抵抗詩人」であったと言えるだろう。

しかし、尹東柱を単に「民族詩人」としてのみ位置付けるのは、詩人に対する評価の不当な縮減である。実際に詩を味読するとよく分かるが、尹東柱の詩は「抵抗」という熟語から連想されるような激越さとは対極にある、純麗なものである。

尹東柱は、民族詩人であり、キリスト教詩人でもあった。それぞれの断面においていずれも正しい。しかし、頻見されるこうした語り方は時に陥穽になり得る。「民族詩人か、キリスト教詩人か」という二項対立的な問いの下に、尹東柱を+／－で切り分けようとするとき、我々はその真面目を捉え損ねてしまうからである。このことは、〈書いた人＝écrivain〉とメトニミカルに同一視される〈書かれたもの＝écriture〉についても同断である。彼の詩を二分割思考のフレームに押し込めようとすることは、ある種の矮小化と言ってよいだろう。片言隻句に、民族主義的ないしキリスト教的な色彩を専一的に汲み取ろうとするような読みの呪縛から我々は自らを解放せねばならない。ロラン・バルトは夙に「作品の説明が、常に、作品を生みだした者の側に求められる」ような読み方に対して異議申し立てをしたが（「作者の死」）、これは尹東柱の作品を繙読する際にも当てはまる。解

釈が読み手のフリーハンドに委ねられるような読み方がもっととされてよい。一意的な解釈の強要はある種の暴力である。拘縮した感性で尹東柱の詩に接することは、それが持つ豊かさを遮蔽することにも繋がるであろう。詩の豊饒性は、その不確定性、一般抽象性の高さに在る。この点において、尹東柱の詩を、韓国語の授業で語学の純粋な教材として切開したり、市民の集まりで自由闊達に寸感を述べ合ったりすることには、大いなる意義があると言いうる。また、歴史的文脈の意味付与が困難な童詩（童謡詩）もあまた物していることから分かる通り、一口に尹東柱の詩といっても多様である。尹東柱の詩に「一貫性の原理」を過度に期待するのも正しい読みの態度ではない。カメラ的なものとして遠くから見響かすことも必要かもしれない。さらに、「韓国の詩人か、共和国の詩人か、中国の詩人か」といった狭量な問いもほとんど無意味である。こうした類の問いは、彼の圧倒的な詩藻を前に無化される。

とはいえ、彼の詩群を、新批評＝ニュークリティシズムよろしく、社会的、歴史的文脈から完全に切り離して読むこともまた不可能である。詩には社会が^{もど}塗られ、歴史が溶け込んでいる。そして、尹東柱の生に思いを致しながら、その詩を賞翫することは、福岡の地で尹東柱を読むことの意義にもなりうる。尹東柱が置かれたコンテクストに対して「集学的」に接近しつつ、彼の至純なる詩趣を自由に感受すること——こうした二重の構えが尹東柱の読解には要請される。言うまでもなく、歴史を踏まえることと、開かれた複数の解釈を許容することは矛盾しない。

3.3. チャン・リュルと尹東柱

チャン・リュル監督は、延辺朝鮮族自治州の延吉市出身の中国朝鮮族3世である。延辺大学で中国文学を専攻、その後、同大学で教鞭を執り、さらに小説家としての活動もある。つまり、チャン・リュル監督は映画監督として知られているが、もともとの経歴は文学者として出立しており、その意味で、尹東柱と相通するところがある。尹東柱も生き^{ながら}存えていれば、朝鮮族と範疇化されていたはずの出自であり、詩人で、さらに言えば、現在の延世大学校の卒業生である。延世大学校は現在、チャン・リュル監督が教授として勤務している大学であり、このように、チャン・リュル監督と詩人尹東柱には、幾重にも共通点が認められる。

ところで、これらはふたりの外形的な共通項だが、朝鮮族というのは、在日コリアンや中央アジアの高麗人と同様に、いわゆる〈コリアン・ディアスポラ〉である。彼らは、境界＝ボーダーに佇立し、アイデンティティに苦悶しつつ引き裂かれる存在であると同時に、複数の地域や文化を接ぎ木する紐帯のような存在でもある。

西谷郁（2022）が指摘するように、チャン・リュル監督の作品自体も、とりわけ2014年の『慶州』以降、登場人物は「生き甲斐」を大切にする「工作者」（谷川雁）のような人々が中心となり、「移動」や「旅」が積極的に描かれるようになってくる。社会学者のタルコット・パーソンズの術語を借りれば、彼らの生き方は〈コンサマトリイ的〉と言ってもよいだろう。翻って、尹東柱もまた移動する人であって、これは自らの意志というよりは、時代に強制的に運ばれた側面も大きい。前述の通り、旧満州、平壤、京城（ソウル）、東京、京都、福岡と、27年という短い生涯のなかで、東アジアを移動し続けた。言語についても、朝鮮語は固より、日本語や英語にも通達しており、残されていた蔵書からは、高沖陽造や三木清、林達夫、三好達治、ポール・ヴァレリー、ディルタイなどを日本語で読んでいたことが窺える⁸。

したがって、尹東柱は一般的には「韓国の国民的詩人」と言われるが、実際には「東アジアに生きた詩人」であって、チャン・リュル監督もまた「東アジアの映画人」と呼ぶべき人物である。そ

れゆえに、監督が「尹東柱に強い思い入れを持っている」というのは首肯しうる。

3.4. 劇中に登場する詩について⁹

先に述べた如く、『群山』には「序詩」が登場する。また、『福岡』には「自画像」と「愛の殿堂」が現出する。以下、おのおのについて簡単な解説を施したい。

3.4.1. 「序詩」

これは詩集『空と風と星と詩』の劈頭の詩で、尹東柱の最も有名な作品である。現在は「序詩」と呼ばれているが、元々は無題であり、詩集を編む過程で、最後に書かれた詩である。「序詩」が付加されることで、『空と風と星と詩』という詩集が完成を見たと言ってよい。1941年11月20日のことである。その翌月には太平洋戦争が勃発するという、剣呑なる雰囲気がいよいよ色濃くなる時期であった。

「序詩」をめぐっては、多くの論攷があり、その日本語訳についても幾多の議論が既存しているので、本稿ではその委曲には触れない。1点だけ特徴を挙げるとすれば、わずか9行の短い詩の中に「죽다」《死ぬ》という動詞が2度使用されている点である。1つは冒頭の「죽는 날까지 하늘을 우러러」《死ぬ日まで天を仰ぎ》という箇所、もう1つは「모든 죽어가는 것을 사랑해야지」《すべての死にゆくものをいとおしまねば》という箇所である。特に後者の「すべての死にゆくもの」というのが何を指称しているのかという点がしばしば釈解の俎上に載せられ¹⁰、伊吹郷の「生きとし生けるもの」という生死を反転させた翻訳が争論を惹起したことは周知の通りである。「抵抗詩人」としての尹東柱という観点から照らせば、日本によって祖国の土地が蹂躪され、名前が剥奪され、さらには言語までが塵殺されようとしていて、そうしたすべての「朝鮮的なもの」がまさに死にゆく状況を悲憤慷慨しているという解釈が可能であり、一方で、「キリスト教詩人」としての尹東柱、「博愛主義的」な尹東柱という観点から照らせば、戦争という狂気の沙汰の中で、文字通りすべてのものが終焉へと向かっていることを心底悲嘆しているという読解ももちろん可能であろう。

3.4.2. 「自画像」

「自画像」は、『空と風と星と詩』の2番目に掲載されている詩（「序詩」を除けば冒頭詩）であり、延禧専門学校2年次、1939年9月に書かれている。井戸の中を覗き込んでそこに映る自分を見て、なぜかその姿が憎くなって、帰ろうとするが、今度はその姿が哀れに思えてきて、また引き返して、井戸を再度覗き込むという内容の詩であり、〈自己嫌悪〉と〈自己憐憫〉という両価的な感情が反復される〈自己省察の詩〉である。

尹東柱にとって、この時期は、大学の寮を出て、現在のソウルの阿峴洞あたりで下宿生活をしていたところで、当時のことを尹東柱は「終始」という文章の中で、「人間を離れることで道を修めるといのは一種の娯楽であり、娯楽ゆえ生活にはなりえず、生活がないからそれはまた死んだ勉強ではないか。勉強も生活化しなければならぬ」と思い、近いうちに門内へ移ることを、内心、はつきり決めてしまった」と書いている。1939年は、創氏改名が公布され、ヨーロッパでは第二次世界大戦が開始された年でもあり、特に当時は大学まで行く人というのは卓絶したエリートであったので、かかる状況にあって、自分は一体何のために学問をしているのかなどといったことを真剣に考え始めた時期だと推考される。そして、それがこの自己省察の詩にも表出されているように思量される。

3.4.3. 「愛の殿堂」

尹東柱が延禧専門学校に入学してまだ間もない1938年6月に認められた詩で、「順よ おまえはわが殿堂にいつ入ってきたのか？」という一文で始まる。「スニ」とは、映画『福岡』に出てくる男性2人がかつて愛した女性の名前でもあるが、尹東柱の詩には「スニ（順伊）」という女性が出てくる詩が都合3篇存在する。1つがこの「愛の殿堂」であり、もう1つはその翌年に書かれた「少年」である。そこには「美しい順伊の面差しが泛ぶ」の如き情熱的な表現が見える。さらに延禧専門学校を卒業する1941年には「雪降る地図」という詩を著しており、その中に再び「スニ」が登場する。「順伊が去るという朝 せつない心でぼたん雪が舞い…」云々という一節が含まれる。

そして、この「スニ」が一体誰なのかという問題が夙に問われてきたが、これは梨花女子専門文科の学生で同じバイブル・クラスに通っていた女性がモデルになっている、しかし、ふたりがそれ以外の場で会うことはなかったようだ、というようなことを友人の鄭炳昱が1976年に『ナラサラン』という雑誌において述べている。なお、尹東柱の妹の尹恵媛の証言によれば、ソウルで出会ったスニ以外に、尹東柱はその後、東京で出会った朴春恵という女性がいて結婚まで考えていたが、結局その恋も結実しなかったという。

そうした事実を勘案すると、この「愛の殿堂」という詩は、尹東柱の実らなかった淡い最初の恋心を描いた詩ということになるだろう。

4. おわりに

最後に、筆者が映画『柳川』『福岡』『群山』に寄せた公式コメントを引用し、攔筆する。

『柳川』

過去の忘れられぬ恋が旅にいざなうのは『福岡』と相似するが、その趣は大きく異なる。終わりの始まり、喪失の遍在——末期がんの宣告から始まる本作には、死の影がゆらゆらと揺曳し、その律動はあたかも柳川の水路の如くだ。柳川の情景は北京の後海での追憶と二重写しになり、時間を遡航する旅へと変色していく。チャン・リュル監督作品の通奏低音とも言えるポリグロット性は本作にも響いているが、ヤナガワ＝リウチュアンにデュアルな意味を付与したり、言語の威信性を剔抉したりするなど、『柳川』は他二作以上に「ことば」が重要な役割を果たしているように感ぜられた。——辻野裕紀（九州大学大学院准教授・言語学者）¹¹

『福岡』

これはどこの映画なのか——『福岡』は映画に関してしばしば問われるこうした凡庸な問いを峻拒し、無効化する。福岡を舞台としつつも、そこは我々が日常的に知覚している「福岡」ではない。場所の遊弋と堆積した時間の往還。それは、見慣れた風景を異化し、その奥に無数のレイヤーが輻輳していることを見せてくれる。そして、韓日漢語が交叉し、それらが「翻訳」なしに通じ合っていくありようは、言語の離散性とロゴス過依存のコミュニケーションを根底から問い直し、東アジアの連続性をけざやかに示している。開かれた抽象性と独特な浮遊感も相俟って、観る者はいつしかどこにもないトポスを幻視する。——辻野裕紀（九州大学大学院准教授・言語学者）¹²

『群山』

群山といえば、日本統治時代の古き街並みを想起する方も多いだろう。しかし、本作が何故に「福岡三部作」に含まれるのか。それを読み解く鍵は詩人尹東柱である。『群山』で一再ならず言及される尹東柱が、ほかならぬここ福岡の地で殞命しているからだ。尹東柱は間島で生まれ育ち、延禧専門学校（現在の延世大学校）に学んだが、チャン・リュル監督も朝鮮族であり、文学者、さらには延世大学校で教鞭を執るなど、ふたりには共通点が多い。本作には監督の尹東柱への思いがとりわけ強く触知される。布置結構がいささか複雑だが、これはある種のディアスポラ性の象徴のようにも見え、移動という営為について思考を傾ける契機にもなろう。——辻野裕紀（九州大学大学院准教授・言語学者）¹³

注

- 1 ヴァーガス、マジョリー・F（1987：15）参照。
- 2 尹東柱の生涯については、辻野裕紀（2021b）も参照されたい。
- 3 1939年創刊。小説家の李泰俊が主宰し、「東洋趣味」の雑誌である。白川豊（2008：54-55）参照。
- 4 1939年創刊。評論家の崔載瑞が主宰し、『文章』とは対照的に「西洋趣味」の傾向が窺われる。白川豊（2008：55）参照。
- 5 宋友恵（2009：467）参照。
- 6 「希望」というところから少し敷衍すると、福岡では「福岡・尹東柱の詩を読む会」が主体となって、毎月尹東柱の詩を読み開いたり、前述のように毎年2月に追悼式を執り行ったりしている。すなわち、現在でもこの福岡の地には、尹東柱の詩を玩読したり、尹東柱の生に思いを致したりする人々が一定数いるということであり、これもひとつの希望である。その模様は、NHKの「こころの時代～宗教・人生～ 詩人 尹東柱を読み継ぐ人びと」（2019年2月）で取り上げられ、筆者も制作に協力した。
- 7 本節は、辻野裕紀（2021b：80-81）でも述べた内容である。
- 8 尹東柱の蔵書については、多胡吉郎（2017：223-282）を参照のこと。
- 9 本節の執筆には、宋友恵（2009）などを参照している。
- 10 多胡吉郎（2017）が、ロバート・バーンズの英詩に現れる「mortal」という語から着想を得て、この「すべての死にゆくもの」と『空と風と星と詩』の掉尾の詩「星をかぞえる夜」の「immortal」な世界観との対照性を指摘しているのは、たいへん興味深い。
- 11 <https://www.1st-generation.com/?p=7604> 『チャン・リュル『柳川』『福岡』『群山』公開記念〈チャン・リュル福岡三部作〉と福岡シネマトリップ・マップ』（福岡フィルムコミッション）より。
- 12 『チャン・リュル『柳川』『福岡』『群山』公開記念〈チャン・リュル福岡三部作〉と福岡シネマトリップ・マップ』（福岡フィルムコミッション）より。
- 13 『チャン・リュル『柳川』『福岡』『群山』公開記念〈チャン・リュル福岡三部作〉と福岡シネマトリップ・マップ』（福岡フィルムコミッション）より。

参考文献

- ヴァーガス、マジョリー・F (1987) 『非言語^{ノンバーバル}コミュニケーション』、石丸正訳、東京：新潮社
- 白川豊 (2008) 「近現代文学史」、野間秀樹編著『韓国語教育論講座 第4巻』、東京：くろしお出版
- 宋友恵 (2009) 『空と風と星の詩人 尹東柱評伝』、愛沢革訳、東京：藤原書店
- 多胡吉郎 (2017) 『生命の詩人・尹東柱：『空と風と星と詩』誕生の秘蹟』、東京：影書房
- 辻野裕紀 (2021a) 「ことばを喪失するということ、ことばを記録するということ：映画『マルモイ ことばあつめ』によせて」、『言語文化論究』46、福岡：九州大学大学院言語文化研究院
- 辻野裕紀 (2021b) 「詩人尹東柱と福岡」、『言語文化論究』47、福岡：九州大学大学院言語文化研究院
- 辻野裕紀 (2023) 「〈チャン・リュル福岡三部作〉浅析：言語論と文学の交差路として」、対照言語学研究会第4回例会発表要旨 (2023年3月10日、於福岡大学)
- 西谷郁 (2022) 「ディアスポラと労働・工作の表象：2014年以後のチャン・リュル映画についての一考察」、森平雅彦・辻野裕紀・波潟剛・元兼正浩編『日韓の交流と共生：多様性の過去・現在・未来』、福岡：九州大学出版会
- 野間秀樹 (2021) 『言語 この希望に満ちたもの：TAVnet 時代を生きる』、札幌：北海道大学出版会

* 本稿は2022年12月25日に KBC シネマで行なわれた映画『福岡』アフタートーク「尹東柱の詩とチャン・リュル映画」(ゲスト：辻野裕紀、聞き手：三好剛平)において筆者(辻野)が展開したトーク内容を整理し、さらに加筆修正を施したものである。